

## 世界防災フォーラムセッション

### 「多文化社会と防災―多様な主体によるグッド・プラクティス」開催結果概要

1. 日時 平成 29 年 11 月 26 日（日曜）14 時 30 分～16 時 00 分
2. 会場 仙台国際センター会議棟 3 階「白樺 1」
3. 主催 仙台市（文化観光局交流企画課）、（公財）仙台観光国際協会
4. 入場者数 110 名（うち外国人 24 名）

#### 5. 構成・登壇者

- コーディネーター 菊池 哲佳 氏（公益財団法人仙台観光国際協会）
- コメンテーター 横田 宗親 氏（一般財団法人自治体国際化協会）
- パネリスト 八木 浩光 氏（熊本市国際交流振興事業団）  
野上 恵美 氏（ベトナム夢 KOBE）  
小松 パトリシア紘美 氏（栃木県国際サポートセンター）

#### 6. 概要

外国人住民が増加する中で、災害が多発する日本においては、災害時の外国人支援、外国人住民との協働が重要な課題となっています。当セッションでは、「多文化と防災」というテーマでグッド・プラクティスを共有し、多様な主体による防災の取り組みについて考えました。

#### 7. 内容

##### （1）はじめに

コーディネーターの菊池氏より、セッションの基本となる視点について説明がありました。

外国人住民や外国人旅行者が増加している現状や、東日本大震災において、日ごろからの取り組みを通じて培われたネットワークが生かされ、市民との協働による「仙台市災害多言語支援センター」の運営や、エフエム仙台との協働での多言語放送につながった事例などが紹介されました。

また、外国人住民・旅行者が増加する中、避難所運営をはじめとして、災害時に適切に対応していくためには、災害時の外国人支援ということにとどまらずに、外国人住民との協働なども含めた「多文化社会における防災」を考えていく必要があります。それは、外国人住民だけの問題ではなく、社会全体の課題、そして世界全体の課題だということが述べられました。

## (2) 事例発表

続いて、3名のパネリストから「多文化社会と防災」というテーマで発表していただきました。

八木氏からは、熊本地震の際に外国人コミュニティによる多くの支援活動が行われ、「多文化パワー」を感じた経験について、そして、日本人住民と外国人住民の日頃のつながりがいかに大切かということをお話いただきました。

野上氏からは、阪神・淡路大震災から20年以上が経過した神戸において、震災の経験を次世代に継承していくために作成した報告書について、そして、防災知識を次世代と共有していくために行っているラジオ番組制作の取り組みについてご報告いただきました。

小松氏からは、東日本大震災での被災経験、またその経験を活かし2015年9月の関東・東北豪雨災害の支援者として外国人住民のための相談会の開催や避難所巡回などの活動をしたことについて発表していただきました。

## (3) パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、コーディネーター、コメンテーターが加わり、各事例において会場の皆さんと共有したいグッド・プラクティスや、今後の課題について意見が交わされました。

3名のパネリストから、それぞれのグッド・プラクティスが紹介され、コメンテーターの横田氏により、それらが実現できたポイントとして、1つ目に外国人住民同士のつながり、2つ目に、外国人住民の中のキーパーソンや外国人のコミュニティといった外国人住民と自治体や国際交流協会などとのつながりが挙げられました。

2つ目のポイントの事例として、熊本市では、市が出産した全家庭に連絡をしているが、外国人家庭には通訳が同行し、地域との交流や日本語教室等の案内も同時に行い、外国人住民と地域をつなげる役割を担っているということでした。また、外国人コミュニティのキーパーソンの方々を集めて情報交換会を行ったり、キーパーソンの方が交流センターの多言語相談員として活動するなどの取り組みを通じて、外国人住民の方と自治体や国際交流センターとのつながりを構築しているということでした。

横田氏からは、まずはこのような自治体や国際交流協会と外国人住民とのつながりを確保するための取り組みが全国各地で展開されることが求められると述べられました。

その上で、各参加者からは、さらにステップアップした取り組みとして、地域の外国人住民と日本人住民の方を直接つなぐような継続的な交流の実施が今後の大きな課題として挙げられました。この課題に対する熊本市の取り組みとしては、地域に住む外国人住民と日本人が集まり、会話を楽しむ日本語教室を運営し、交流をしながら支え合える関係づくりを進めているとのことでした。また、野上氏からは、阪神大震災から20年以上が経過した神戸では、震災の経験が風化されつつある現状が課題として挙げられましたが、横田氏より、外国人コミュニティと自治体や国際交流協会とが連携することで、対応策を講じていくことができるのではとのコメントが述べられました。

さらに、今後は外国人住民が増加する一方で、日本社会は少子高齢化に直面しており、

外国人住民の方には、災害時に支援者としても活動し、地域のパートナーとして支え合うといった協働の役割が今後ますます期待されていくとのコメントが述べられました。

会場からの質問を受け、小松氏や八木氏より災害時に日本人住民と外国人住民との間で起こったトラブルの事例についても紹介がありました。横田氏より、これらのトラブルは、災害に対する知識や情報の不足が原因となることがあり、この課題に対する取り組みは、パンフレットの作成や防災訓練への外国人住民の参加の呼びかけなどを通して全国各地で進められている状況があるが、「日ごろのつながりの構築」という課題については、今後特に重きを置いて取り組んでいくことが重要であるとのコメントが述べられました。

#### 8. 参加者からの声（アンケートより）

- ・多文化社会の中で様々な問題が起こりやすいですが、日本人と外国人との協力で、その壁を取り除くことができるでしょう（留学生）
- ・ことばを使わないジェスチャーのみの訓練など、興味を持ちました。多文化だけでなく、多様な人間が住んでいるということを実感しました（教員）
- ・外国人には災害弱者だろうから親切にしなければという感覚でおりましたが、宗教・生活習慣など対応すべき、対応しうる、または歩み寄るべきものを平時より知り、考えておくべきと感じました。（公務員・団体職員）
- ・町内会などで外国人や外国人コミュニティとのいい関係ができた事例なども知りたかったです。（公務員・団体職員）
- ・防災文化を世界に発信していくうえで、「在住外国人」の問題は大きいと思いますし、日本人に気付かない視点を日本人が取り入れることにより、より国際水準の防災文化を構築していくことができると思います。（公務員・団体職員）

#### 写真



